

笑顔の架け橋

福井県 棗中学校 1年 佐藤 美早紀

「お弁当配りのボランティア、なにかおもしろそう。」
と軽い気持ちで参加したのは、私が小学1年生のとき。この企画は、PTCAのお母さんたちの手作りのお弁当を、地域の一人暮らしのお年寄りに、民生委員の方と子どもたちで届けるというものだ。この頃の私は、とても人見知りで、お弁当を届けに行っても、大人の後ろに隠れていた。おばあさんに、

「わざわざ、ありがとねえ。」

と言ってもらえても、恥ずかしくて、ただただうなづくことしかできなかった。

私が4年生のとき。いつも通り私は一軒一軒、一人暮らしのお年寄りにお弁当を届けに、民生委員の方とともに回っていた。そのとき、玄関の前に杖を持って腰を下ろしているおばあさんの姿が。(あれっ？さっき通り過ぎたときも座っていたはず……)。

なんと、このおばあさんの家が最後の一軒だったのだ。まさか、私たちがお弁当を届けに来るのを、ずっと待っていてくれたなんて。足が悪いのに、わざわざ杖をついて、それも長い間、たった一人で……。どんな思いで待っていてくれたんだろう。

私は、なんだか胸がじーんと熱くなってきて、

「ずっと待っていてくれて、ありがとうございます。これからも、ずっとお元気に長生きしてください。」

初めて言えた。今まで、照れくさくて言えなかった言葉。心からそう言っている自分がいた。

「ありがとねえ。」

と、さっきまで一人ポツンと寂しそうに見えたおばあさんの顔が、みるみる笑顔に変わっていった。なんとも言えないやさしそうなその顔。私はうれしくて幸せな気持ちでいっぱいになった。今までは、なにかひとこと、言わなくてはと思い、心が苦しかったが、今では自然と、「お元気に、長生きしてください」という言葉があふれてくるようになったのだ。自分は、何を恥ずかしがっていたのだろう。今まで、一人暮らしのお年寄りの気持ちを考えたことがあっただろうか。

そして、気づいた。「お弁当配り」は、ただ単に美味しいお弁当を作って届けるだけではない。このお弁当には、PTCAのお母さんたちの「思いやりの心」が詰まっている。たった一つのお弁当が、人と人とをつなぐ「笑顔の架け橋」になっているのだと。

私一人では、大きな力にはなれない。けれど、「お弁当配り」を通して一人暮らしのお年寄りに少しでも笑顔になってもらいたい。

そんな私も、今年からは中学生。中学生になると、お弁当作りも手伝えるようになる。お料理が苦手な私だけど、「元気に長生きしてね」と、心を込めてお弁当作りを手伝いたい。今までに出会った、一人ひとりのやさしい笑顔を思い浮かべながら。